

# アメリカ詩の研究

長 畑 明 利

2017年のノーベル文学賞はイギリスの小説家カズオ・イシグロが受賞した。作家が日本生まれで、初期作品が日本を題材にしているからか、メディアが異例の大騒ぎを繰り広げたのは周知の通りである。思えば1年前にはアメリカのシンガー・ソングライター、ボブ・ディランが同賞を受賞し、イシグロのそれとは性質を異にするものの、やはりメディアを中心に大きな反響を呼んだ。数多くの新聞やウェブサイトでディランが紹介され、ノーベル賞受賞を解説する記事が掲載された。雑誌が特集を組み(『現代詩手帖』2017年2月号ほか)、ムックが発売され(『ボブ・ディラン マイ・バック・ページズ』[KAWADE 夢ムック文藝別冊、2016年12月]ほか)、テレビの解説番組で取り上げられ(NHK「視点・論点」)、伝記が新装版で再発売された(ハワード・スーンズ『ダウン・ザ・ハイウェイ——ボブ・ディランの生涯』菅野ヘッケル訳、河出書房新社、2016年11月)。記事や論考の多くは啓発的な内容のものであったが、多くのアメリカ文学研究者が関わった。賞がきっかけであるとはいえ、アメリカの文学・文化に多くの人が注目したことは悪いことではない。研究成果を社会へ還元するよい機会でもある。

ディランに関しては、ノーベル文学賞受賞後に出版された2冊の新刊書に触れておく。鈴木和成『ボブ・ディランに吹かれて——春樹、ランボーと聴く詩』(彩流社、2017年2月)は、村上春樹、アルチュール・ランボーと関連づけてディランを論じるもので、3部からなる。第1部「ボブ・ディラン / 村上春樹」は、『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』をはじめとする村上作品に見られるディランへの言及などを論じ、第2部「ボブ・ディラン / ランボー」は、ディランとランボーの類似、『血の轍』等のディラン作品に見られるランボーの『イルミネーション』の影響などについて考察し、第3部「ボブに吹かれて」は、ディランのアルバム『ラブ・アンド・セフト』や映画作品『ボブ・ディランの頭のなか』などを論じる。ランボー論の著書のあるフランス文学者が論じるディラン論であり、英米文学の研究者とは異なる領域が掘り下げられている点が興味深い。もう1冊、菱川英一『ボブ・ディランの詩学』(Stiiideo Gaeilge, 2017年3月)は、ディランの歌詞を「歌われる詩」の観点から論じるもので、バラッド形式や韻律に注目しつつ、「風に吹かれて」「はげしい雨が降る」「時代は変わる」「ノット・ダーク・イエット」などの作品を解説している。

ボブ・ディランが話題になった当該期(2016年4月～2017年3月)であるが、以下では、その他のアメリカ詩(と言っても、ディランは「アメリカ詩」という枠には収

## 回顧と展望

まりきらないやっかいな存在だが)に関する研究成果を振り返りたい。

まず、田中泰賢『Buddha 英語文化』(田中泰賢選集)(全5巻、あるむ、2017年2月)を取り上げる。著者がこれまでに発表・出版してきた論考や翻訳などを集めたものである。第1巻『英語・文学・文化の仏教』は11章からなり、19世紀アメリカにおける仏教研究、あるいは、仏教に関連する論考や詩作品の翻訳・紹介(エドウィン・アーノルド、リディア・マリア・チャイルド、トマス・W・ヒギンソン、ダイズイ・マックフィラミーの著作など)、日本人研究者による研究の紹介などを収録する。第2巻『スティーブンス、ウィリアムズ、レクスロスの仏教』は14章からなり、これら3人の詩人を主として仏教の観点から考察した論考を収録する。第3巻『ギンズバーグとスナイダーの仏教』も14章からなり、二人の詩人の作品をやはり仏教の視点から論じる。第4巻『Buddhism in Some American Poets: Dickinson, Williams, Stevens and Snyder』は、これら4人の詩人を論じる英文論考(著者の博士論文)である。第5巻『禅 Modern Zen Poems of Toshi Tanaka』は、著者の父田中登志による現代禅詩集(英訳と絵を添えた対訳版)、ならびに、Appendixとして、著者の師や家族らによる文章・書画などを収める。各巻のタイトルにも窺われるように、本選集は著者のアメリカ詩研究が一貫して仏教と関連づけられたものであることを示しており、仏教(禅)を実践する人にとって文学を研究することがどのような意味を持つかについて考えさせてくれる。また、仏教の観点からアメリカ詩について考察することは、それ以外の観点からの研究とは異なるいかなる作品評価をもたらしうるのかという思いにも駆られる。アメリカの仏教詩人は多岐に亘る。Andrew Schelling, ed, *The Wisdom Anthology of North American Buddhist Poetry* (2005)には、フィリップ・ホエーリン、ダイアン・ディプリマ、ジェイン・ハーシュフィールドら、数多くの詩人の作品が収録されている。誰にでも出来る研究ではないかもしれないが、これらの詩人を含むアメリカの仏教詩人について、仏教の視点からなされる考察も今後生まれてくるものと思われる。期待したい。

ここからは、詩人の年代順に当該期の研究成果(翻訳を含む)を概観する。まず、アメリカ建国期の詩人を扱った論考としては、小泉由美子「愛国の響き——ティモシー・ドワイトの詩『グリーンフィールド・ヒル』(1794年)第四部「ピークオッド族の壊滅」を読む」(『アメリカ研究』51, 2017年3月)がある。本論考は、アメリカ独立期のいわゆる「コネティカット・ウィッツ」の一人であるドワイトの作品を、先住民宣教の観点から論じるとともに、その詩形に注目して、彼の叙事詩の諸相を明らかにしようとするものである。独立期の詩人の研究はそもそも少ないが、それを歴史的関心からの考察だけでなく、形式面からも考察している点を評価したい。

エマソンに関しては、小田敦子、武田雅子、野田明、藤田佳子訳『エマソン詩選』(未来社、2016年5月)が出た。10年余の翻訳作業の成果だという。まずは刊行を慶

## アメリカ詩の研究

びたい。本訳書は、エマソンの *Poems* (1847) ポストン版初版および *May-Day and Other Pieces* (1867) 初版を定本とする。合計 50 篇の詩の翻訳を収録し、詩は第 1 章「身近な自然と言葉」、第 2 章「同時代の場面」、第 3 章「風景」、第 4 章「詩人の仮面」、第 5 章「四行詩と翻訳詩」に分類されている。日本では大正時代に選集が出版されて以来、エマソンの詩の代表作が選集に収められることはあったが、今回初めて訳されたものが多いという。巻末には「エマソン概説」(藤田佳子)、「エマソンの詩」(小田敦子)および「エマソン年譜」が掲載されている。

ホイットマンについては、舌津智之「情動の響き」(竹内勝徳、高橋勲編『身体と情動——アフェクトで読むアメリカン・ルネサンス』[彩流社、2016年4月]所収)が“Crossing Brooklyn Ferry”を論じている。作品中に見出される“ass”という文字列を含む単語に注目し、その響きと視覚イメージを複数の文脈に接続して考察するという、意表を突く着眼点に驚かされるが、様々な傍証が提供されており、刺激的な議論が展開されている。また、『日本英語英文学』No. 26 (2016年12月)には、Takehiko KAGA, “The Past as the Great Unrest: Walt Whitman and T. S. Eliot”が掲載されている。

エミリー・ディキンソンの研究は近年活況を呈しているが、当該期には、『私の好きなエミリー・ディキンソンの詩』(新倉俊一編、金星堂、2016年6月)が出た。本書はディキンソンの研究者 23 人が、自分が好きなディキンソンの詩を 1 篇ずつ選び、詩の和訳とともに、なぜその詩が好きかを含む解説を書いたものである。23 人が 1 篇ずつ選んでいるが、フランクリン版 359 番「鳥が一羽 歩道に降りてきた」を 2 人が選んでいるため、詩の総数は 22 篇となっている。雑誌やウェブサイトに掲載される The 10 Best Emily Dickinson Poems などでは常連の作品(たとえば、“I taste a liquor never brewed”; “Success is counted sweetest”; “I felt a Funeral in my Brain”; “Because I could not stop for Death”; “My Life had stood — a Loaded Gun”など)が選ばれていないことが興味深い。一方、1488 番(「おれたちの誰にもタッチし損なった」)の解釈など、議論を呼びそうな、刺激的な考察もある。本書も研究をベースにしつつ、一般読者にディキンソンの詩を紹介する啓蒙的企画と言える。本格的な研究も読みたいが、アメリカ詩への関心が低下しているように思われる今、詩人への関心を高める試みも必要であろう。

ディキンソンについては、さらに『アメリカ文学研究』第 52 号(日本アメリカ文学会、2016年3月)に、石川まりあ「神殿を建てる大工——Emily Dickinson の「家」と創作の作法」が掲載されている。ディキンソン作品に見出される「家」のモチーフを詩作の比喩として捉え、ディキンソンが詩という家を「本物の詩」あるいは「言葉にならぬもの」を招き入れるものとして描いていることを論じている。

20 世紀前半の詩人に移る。まずロバート・フロストに関しては、サンドラ・L・キャッツによるフロストの妻の伝記、『エリノア・フロスト——ある詩人の妻』(藤本

## 回顧と展望

雅樹訳、晃洋書房、2017年1月)が出版された。詩人のパートナーに焦点をあてた書籍としては、昨年本欄でも言及したエリザベス・ビショップと彼女が16年間生活をともにした女性ロタ・ジ・マセード・ソアレスを取り上げた、カルメン・L・オリヴェイラ『めずらしい花 ありふれた花——ロタと詩人ビショップとブラジルの人々の物語』(小口未散訳、水声社、2016年1月)や、ヨネ・ノグチ(野口米次郎)と短期間ながら結婚し、イサム・ノグチの母となったレオニー・ギルモアを取り上げた、エドワード・マークス『レオニー・ギルモア——イサム・ノグチの母の生涯』(羽田美也子、田村七重、中地幸訳、彩流社、2014年1月)などがある。詩人のパートナーについて知ることは、詩人をそのパートナーの目から見ることにつながるが、同時に、一人の創作者の傍らに生きることの現実を知ることにもなる。他の事例との比較研究も待たれるところである。

エリオットに関しては、『T. S. Eliot Review』第27号(日本T. S. エリオット協会、2016年11月)に、舌津智之「SFホラーの詩学——T. S. エリオットとステイーヴン・キング」(第28回大会の特別講演に基づく)、同シンポジウム「引用するエリオット、引用されるエリオット」に基づく論考4点(山本勢津子、三宅昭良、秋草俊一郎、山口均)、論文3点(熊谷治子「「ある婦人の肖像」における「ある婦人」と「ショパン」——私通の「エンハーモニック転調」をめぐって」、Atsuko Yamaguchi, “A Comparison of the Four: Time, Eternity, and Words in *Four Quartets*”, 瀬古潤一「『荒地』と『我が共通の友』再考」)が掲載されている。

パウンドについては、David Ewick, “Ezra Pound and THE INVENTION OF JAPAN, I” (『英米文学評論』[東京女子大学英米文学研究会]第63巻、2017年3月)が、また、ウィリアムズに関しては、齋藤昌哉「ウィリアム・カーロス・ウィリアムズによる絵画詩——“Landscape with the Fall of Icarus”における時間の文節とその機能」(『Reading』[東京大学大学院英文学研究会]第37号、2016年12月)がある。

第2次大戦後の詩人に関しては、シルヴィア・プラスの詩に見られる「身体内部から何ものかを取り出すこと」のモチーフを取り上げた、井上詩歩子「生まれることのない言葉を抱えて——シルヴィア・プラスにおける肉体的創造」(御輿哲也、新野緑、吉川朗子編『言葉という謎——英米文学・文化のアポリア』[大阪教育図書、2017年3月]所収)の他、以下の論考がある。Kevin Keane, “Surrealism in W. S. Merwin’s ‘The River of Bees’ and Other Poems” (『言語文化学研究』[大阪府立大学人間社会システム科学研究科言語文化学専攻]『英米言語文化編』第12号、2017年3月)、小林愛明、山中章子、池上俊彦、関根路代「[研究ノート]ケイ・ライアン——略伝と作品の特徴、ならびに詩の翻訳(5)」(『英語文化研究』[獨協大学大学院外国語学研究科]第49号、2016年9月)、同「[研究ノート]ロバート・ピンスキー——略伝と作品の特徴、ならびに詩の翻訳(4)」(同第50号、2017年3月)、(名古屋大学教授)